

【投 稿】

ペットの同行避難に関する 意識調査アンケート報告

～ペットを飼育している人、

ペットを飼育していない人それぞれの視点から～

上村 英子^{1,2)} 勝田 珠美¹⁾ 前谷 茂樹³⁾

- 1) NPO法人ニャン友ネットワーク・北海道
- 2) 社会医療法人 北腎会 坂泌尿器科病院 看護師
- 3) まえたに動物病院 (さっぽろ獣医師会)

はじめに

近年、地震、台風、水害、雪害、大規模火災などが毎年のように発生している。災害の多い日本では、もしもの時のために日頃から備えをしておくことが重要になる。ペットブームに伴い愛玩動物の飼育者が増加しているので、「ペットの同行避難に関するアンケート」をペットを飼育している人だけでなく、ペットを飼育していない人にも焦点を当てて調査をしたので、結果を取りまとめて報告する。

アンケートの実施期間と方法

実施期間：2018年1月～2019年10月

実施方法：期間中に開催されたイベントに来場した参加者に対し、無作為に回答を依頼した。対面方式で本人に記入してもらった。

アンケート回答数：ペットを飼育している人233名、ペットを飼育していない人154名の合計387名から回答を得た。
アンケートの内容：ペットを飼育している人には、年齢、飼育ペットの動物種、災害時におけるペット同行避難のイメージ、災害発生時にペットと一緒に避難所に行く？行かないの理由、災害時にペットを預かってくれる所の有無と避難先、被災した時にはどう行動するかなどを質問した。また、ペットを飼育していない人には、年齢、動物が好き／嫌い、過去の飼育歴の有無、災害発生時にペットが避難所に来ることの賛成／反対の理由、避難所にペットを連れてきた人への対応などを質問した。

アンケート結果と考察

回答者の年齢構成を図1に示した。飼育ペットの動物種は犬84頭、猫121頭、その他28頭であった。ペットを飼育していなくても、回答者154名中117名(76%)が動物が「好き」と回答し、「嫌い」と「どちらでもない」を併せても23名(15%)にとどまった。また、現在ペットの飼育をしていない人でも、117名(85%)が過去に何らかのペットを飼育した経験を持ち、飼育未経験と無回答を併せても23名(15%)であった。ペットの飼育の有無にかかわらず回答者全員(384名)に対し、「同行避難とはどういう意味であるか」を質問したところ、①「安全な場所までペットと一緒に避難すること」が220名(57%) ②「避難所でペットと一緒に生活すること」が75名(20%) ③「安全な場所にペットを連れていくこと」が55名(14%) ④「よくわからない」が34名(9%) ⑤「無回答」が3名となり、半数以上が意味を理解していた。しかし、避難所で生活することと捉えているのは19%にとどまった(表1)。ペットを飼育している人に対し

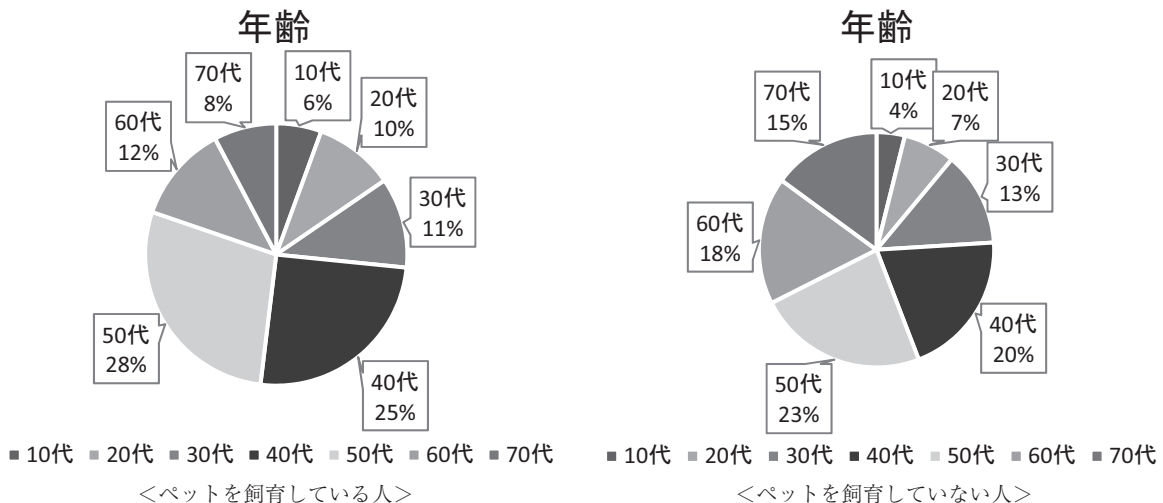


図1. アンケート回答者数の年齢構成

表1. 災害時におけるペットの同行避難とはどういう意味だと思えますか？ (全員)

①安全な場所までペットと一緒に避難すること	220
②避難所でペットと一緒に生活すること	75
③安全な場所にペットを連れていくこと	55
④よくわからない	34
⑤無回答	3

表2. 「行く」と答えた人に質問です。その理由を教えてください。(全員：複数回答可)

家族だから	121
飼い主の責任だから	55
自宅置いてくるのはかわいそう	34
役所が推進しているから	0
その他	1

表3. *「行かない」と答えた人に質問です。その理由を教えてください。(全員：複数回答可)

ペットのストレス	18
自宅の方がよい	16
避難所はペット不可だから	14
周囲とのトラブル	13
人間優先	2
法律で義務ではないから	2
嫌ができていない	0
臭いが気になる	0
予防接種をしていない	0
その他	1

て、災害発生時にペットを避難所に「連れて行く」と答えた人は233名中141名(61%)であり、「連れて行かない」(36名)と「よくわからない」(56名)を併せると92名(39%)となり、躊躇する人も多かった。表2には「連れて行く理由」、表3には「連れて行かない理由」を複数回答可で示した。災害時に預かるところが「ある」人は233名中60名(26%)に対して、「ない」人は169名(72%)であった。預かるところが「ある」と回答した人の預かり場所は表4に示した。ペットを飼育していない人154名に対して避難所にペットが来ることについての賛成の有無を質問したところ、「賛成」が87名(56%)、「反対」が12名(8%)、「どちらでもない」が55名(36%)であった。賛成の理由としては「家族だから」が48名(40%)、「飼い主の責任だから」が35名(29%)が主な理由となった(表5)。一方で反対の意見としては、「動物が嫌い」、「アレルギー」、「糞尿などの衛生問題」があげられた(表6)。では「実際にペットを避難所に連れ来た人はどのしたらよいか」との質問に対しては、「避難所の中で人と部屋を分けて飼育する」が88名(57%)、「避難所の外で飼育する」24名(16%)「避難所の中で飼育する」が22名(14%)、「誰かに預ける」が11名(7%)、「自宅に連れて帰る」が0%であった(表7)。大多数が避難所

表4. 「はい」と答えた人に質問です。それはどこですか (全員)

実家	27
友人宅	17
ペットホテル	5
無回答	1
その他	10

表5. *「賛成」と答えた人に質問です。その理由を教えてください。(ペットを飼育していない人：複数回答可)

家族だから	48
飼い主の責任だから	35
自宅置いてくるのはかわいそう	30
役所が推進しているから	2
その他	5

表6. *「反対」と答えた人に質問です。その理由を教えてください。(ペットを飼育していない人：複数回答可)

動物が嫌い	2
動物のアレルギーがある	2
うるさい	2
糞尿などの衛生面	2
人間優先	1
臭いが気になる	1
法律で義務ではないから	1
避難所はペット不可だから	0
その他	1

表7. 避難所にペットを連れてきた人はどうしたら良いですか (ペットを飼育していない人)

避難所の中で人と部屋を分けて飼育する	88
避難所の外で飼育する	24
避難所の中で飼育する	22
誰かに預ける	11
自宅に連れて帰る	10

表8. 被災した時どのように行動したらよいと思いますか？ (ペットを飼育している人)

誰かに預ける	52
自宅で飼育する	26
車の中で飼育する	16
無回答	4
その他	56

のどこかでペットも生活を共にすることを選択し、避難所に来た状況下で生活困難であるだろう自宅に返す選択をしないというのはアンケート上とはいえ嬉しく思う。ペットを飼育している人に対して、「被災した時どのように行動したらよいと思いますか？」と質問したところ、154名中「誰かに預ける」が52名(34%)、「自宅で飼育する」26名(17%)「車の中で飼育する」が16名(10%)、「無回答、その他」が60名(39%)となっており(表8)、

避難所に連れて来る以外にもできる方法があるならあらかじめ対処法を想定しておくのも一つの手段だと考える。

提 言

これまでの避難所では断水や停電などライフラインが正常に保たれない中で、多数の人との共同生活となっている。この結果、インフルエンザや胃腸炎などの感染症の集団発生や、肺炎、脱水、齲歯、廃用性症候群などが問題となった。2020年より世界的に新型コロナウイルスのパンデミックとなっており、現在もその渦中にある。3密防止のために避難所ではソーシャルディスタンスを保ちながら避難生活を過ごすことになるだろう。おそらく感染症のパンデミックがある程度収束されたとしても、新しい避難所の在り方としてプライベート空間の確保や感染予防が整えられていくことは必須である。災害の規模によっては収容人数の制限もあり、元々ペットの受け入れが思うように進んでいない過去の状況から、災害発生直後の混乱下にペットを連れて行くことは避難所の担当者も困惑する可能性がある。

では、北海道において、災害発生時ペットを室内に受け入れしてくれる場所、室外の敷地を提供してくれるところは一体いくつあるのだろうか？もし受け入れ可能である施設や受け入れの意思のある建物があるのならば、あらかじめ災害発生時ペット受け入れ可能施設登録を行うとよいだろう。そして、各市町村で作成しているハザードマップに「ペットを連れて避難できる避難所、もしくは受け入れ可能な施設」として登録した施設や建物を明記していると災害発生時の混乱やトラブルを最小にできることが可能となる。受け入れ側は「避難所ペット管理シート」を作成しておきペットの把握を行うとよいだろう。

全国には災害発生時に支援活動を行うNPO団体などがいくつもある。胆振東部地震の際には他NPOの情報提供によりペットの命が助かった事例もある。日頃から各団体の動向にも注目し災害発生時には連携をとれるようにしておくのも有効である。また、ペットの防災に関する啓蒙活動も有効であると考え。今まではイベントなど対面方式が主流だったが、これからはオンライン勉強会やYouTube動画での啓蒙活動も開催し、その場にいなくても気軽にペットの防災について知ることのできる環境を作るとより身近なものとして捉えられるのではないだろうか。

今回のアンケートの結果では、ペットを飼育していない人も飼い主と一緒に避難してくることに好意的

に考えていることがわかる。ペットを飼育している人と、ペットを飼育していない人とが共同生活を送るためには、飼い主は日頃からワクチン接種など動物間での感染拡大を予防していくこと、共同生活上で迷惑をかけないように躰をしていくことが求められる。また飼い主は環境省のガイドラインや各市町村、自治体の防災マニュアルを確認し人間だけでなく飼育しているペットの頭数に見合う備蓄を行いきり自分の力で災害発生時に乗り切る力を蓄えておく必要もある。

